

「反逆者」 アモス書 7章10節-17節

選句「イスラエルの家の真ん中で、アモスがあなたに背きました。」(10)

- 1、アモスの素描が今日の(7:10-17、アモスを記述した唯一三人称記録)箇所です。彼は、テコア(エルサレムから20kmの高地、前回参照)の出身。小家畜(羊、山羊)を所有し飼っていた。また、平野地でいちじく桑の木の栽培していたとされます(諸説あり)。かれは生活の現場から神の召命を受け(7:15) 750B.C.頃ベテルで10年活動した。国際情勢には詳しく、自国の歴史に通じイスラエルのヤハウエ信仰に立った人です。都会人ではなかった(7:14, 2:13, 3:12, 4:9)が、預言を記述する(編集は後になされたが、本文には彼の記述を多く含む)知識人であった。風貌は野人であったらしい(3:1-6, 4:9, 5:19)。アモスの預言内容はすでに何回か見て来たように、権力で踏みこまれた貧しい者たちの人間性の回復で、権力への神の審判を語りました。王ヤラベヤムⅡ(786-746B.C.)の「悪」の根本を突いていたのです。
- 2、その活動は王への「反逆者」呼ばわりをされます。王の国家体制を支えていた神殿ベテルの祭司アマジャ(7:10, 12)の発言です。「ユダに逃れ、そこで糧を得よ」といかにも温情を示します。アマジャは「この国は彼のすべてのことばに耐えられません」(10)と、アモスの言葉に真理性を感じていたのです。しかし権力は彼を排除しました。「預言者」の処刑は民衆を動揺させます。アモスの死については分かりません。彼の祭司と王への警告の言葉(11, 17)は約30年後、イスラエルの滅亡となって実現します。「あなたがたより前の預言者たちも同じように迫害された」と福音書が述べている(マタイ5:12)ようにアモスは預言者の系譜の先駆者の一人でありました。
- 3、彼が権力にたじろがずに向き合った根拠は「神の召命(vocation, calling)」でした。召命とは何か。「信仰者が自分の信仰体験を内省することから生まれる使命意識の自覚であり、信仰による生路の決断である。ルターは召命を・・職業も神から受けた使命である(Beruf[職業]は、それへと呼ばれることを原義とした)と強調した」(岩波キリスト教辞典)。イスラエルには神殿や職業祭司・預言者集団とは別に、ヤハウエ(主)への信仰が民衆と共に生きていて、アモスはその系譜にあった人です。そこに保たれていた「神の言葉」が、あらゆる人間的保全(墮落した祭司の営み)を超えて歴史の中で生きたものとなったのです。
- 4、さて、今日、日本の国家体制の根本的権力構造の影には何としてもアメリカの国家体制(資本と軍事力とメディア)があります。この1月沖縄では「アメリカに米軍基地に苦しむ沖縄の声を届ける会(団長山内徳信参議院議員)」が出かけ<sup>て</sup>います。ここにアメリカ支配の実相がでています。「原子カムラ」の構造、経済・技術の仕組の根本にはアメリカとの関連があります。「日米安保条約」はその仕組みの一つです。今日9月9日午前11時の時間「オスプレイ」の持ち込みに反対する沖縄県民集会(11万人規模)で行なわれています。首相官邸前の金曜日デモ、通産省前テントひろばでの「包囲アクション」(9.11)。国家体制に「否」をいうのは一人一人勇気がいられます。私は「小さなアモス」「十字架のイエスに従う者」の投影をここに見ます。